



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スポーツ情報番組のジャンルによる語用論的特徴：日韓対照で見られるスピーチレベルシフトの相違に注目して
Author(s)	鄭, 惠先
Citation	北海道大学国際教育研究センター紀要, 21, 1-13
Issue Date	2017-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70437
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISCHU21_01_JUNG.pdf



スポーツ情報番組のジャンルによる語用論的特徴

－日韓対照で見られるスピーチレベルシフトの相違に注目して－

鄭 惠 先

スポーツ情報番組のジャンルによる語用論的特徴

－日韓対照で見られるスピーチレベルシフトの相違に注目して－

鄭 惠 先

要 旨

本研究では、メディア言語研究という立場から日韓対照の視点を取り入れて両言語による映像メディアの談話を考察した。とりわけスポーツ情報番組の実例をもとに、ジャンルによる語用論的特徴について考察した結果、日本のテレビ番組の談話では番組独自のジャンル特性が言語表現に強く影響していることが示された。たとえば、実況中継のアナウンサーの発話では、常体と敬体の混用が目立つ日本に対して、韓国では常に敬体のみが用いられる。また、報道性より娯楽性が重視されるワイドショーというジャンルは日本に特徴的に見られる映像メディアで、その中の談話はジャンル独自の語用論的特徴を持っている。このように、同じスポーツ情報番組であっても日韓の映像メディアには言語表現の違いが顕著に表れることが明らかになった。今後は、メディア言語研究のさらなる充実を図るために、映像メディアのジャンルと日韓の言語固有性という2つの要素に加えて、日韓・韓日のメディア翻訳をも有機的に関連づけて考察を続ける必要がある。

【キーワード】 ジャンル、実況中継、ワイドショー、スピーチレベルシフト

1. 研究目的

本研究では日本と韓国の映像メディアの談話を語用論的な側面から記述する。とりわけ、日韓のスポーツ情報番組を考察対象として、それらのテレビ番組のジャンルによる語用論的特徴を示し、さらに日韓対照を通して互いの相違点を明らかにすることが本研究の目的である。

テレビ放送に代表される映像メディアのジャンルは多岐にわたる¹⁾。これらの映像メディアはジャンル別に独自の言語表現を持つ。たとえば、ニュースでは、情報伝達を重視したニュートラルな言葉づかいが多く用い

られるのに対して、アニメでは、「そうじゃの」「オレがやるぞ」「いいですのよ」などの、人物像に結びついた「役割語」²⁾の使用が目立つ。

映像メディアは、視覚と聴覚が融合した複合的な表現媒体という面ではかのメディア媒体とは大別される。新聞や雑誌などの活字メディアは、文字と写真という静的な視覚情報のみに依存している。同じように、ラジオなどの音声メディアも限定的な聴覚情報のみに依存している。しかし、現場音を伴う動画を基本とする映像メディアは、従来の活字メディアと音声メディアとは異なる、より直接的で具体的な伝達能力を有する。当然ながら、このようなメディア特性はそこで表現される言語に影響を与え、さらに、この言語表現はジャンル特性と絡み合ってより複雑で重層的になっていくと予想される。

そこで、本稿では、日本と韓国での類似するジャンルのテレビ番組を対照し、映像メディアという複合的なメディア媒体の中で、ジャンルという要素が言語表現にどう影響するか、また、そこに見られる語用論的特徴が日本語と韓国語の間でどう異なるかについて述べる。

2. 日韓の実況中継における言語表現

本節では、日本と韓国のテレビで放送された実況中継の言語表現を対照し、スポーツ競技の実況中継というジャンルが、日本語と韓国語という異なる言語背景のもとで、どのように特徴づけられるかを考察する。その際に、とりわけ「スピーチレベルシフト」という言語現象に注目して分析を行う。スポーツ競技の実況中継は、アナウンサーと解説者の二人体制で進められるのが一般的である。アナウンサーは視聴者に対して情報を伝達する立場であるのと同時に、隣の解説者に質問したり意見を求めたりして対話を行う。常に視聴者または解説者に向けられるアナウンサーの発話では、通常敬体が用いられるはずだが、実際、日本のテレビで放送される実況中継を見ると、アナウンサーの発話に常体が使われることが少なくない。そこで、日韓の実況中継というジャンルの映像メディアにおける言語表現を実際に観察する。

まず、日本のスポーツ競技の実況中継での発話である。映像は、2011年にテレビ朝日で放送された「世界水泳上海2011」で、北島康介選手が出場した男子200m平泳ぎ決勝の実況中継で、最後の150メートル時点からの39秒間をピックアップした。例(1)は実際のアナウンサーの発話の文字起こし

である。ちなみに、発話の合間に解説者の声も数カ所あったが、アナウンサーの発話に影響を与える対話ではなかったため、ここでは割愛した。

- (1) さあ、150メートルのターン。まだ世界記録を上回っている。0秒27。世界記録を上回っています。北島が先頭。ギェルタに対し、2位のギェルタに対し、体半分以上のリードを奪っている。さあ。残り25メートル。ここから我慢の25メートルだ。金メダルに向けた、北島、勝負の25メートル。さあ、北島頑張れ。北島、ギェルタを追いかける。北島とギェルタ。さあ、北島。どうだ。北島、どうだ。北島は銀メダル。

(「世界水泳上海2011 競泳決勝」テレビ朝日、2011.7.29 日本放映)

全体の中で敬体の文末は波線部の1例しかなく、大半が名詞止めか常体の文末であることが見て取れる。

つぎに、韓国のスポーツ競技の実況中継での発話である。映像は、2010年に韓国のテレビ局MBCで放送された「2010広州アジア競技大会」で、パクテファン選手が出場した男子200m自由形決勝の実況中継である。日本の例と同じく、最後の150メートル時点からの28秒間をピックアップした。両映像とも200mの競技で、同じく最後の150m時点からの実況中継というところで条件を統一している。以下の(2)が韓国語によるもとの発話で、(2)'が筆者による日本語直訳である。これも日本の映像と同じく、解説者の声を除いたアナウンサーの発話のみを文字起こした。

- (2) 박태환 던했습니다. 150미터 던했는데요. 자, 기록은03. 베이징올림픽보다 빠릅니다. 베이징올림픽보다 빠릅니다. 예, 이제 마지막 마지막 20미터가 채 남지 않았습니다. 박태환, 장린보다는 몸하나 가까이 앞서 있는 상황인데요. 마지막 5미터. 박태환 거의 다 들어왔습니다. 마지막 5미터. 4. 3. 박태환 금메달입니다.
- (2)' パクテファン、ターンしました。150メートルターンしましたね。さあ、記録は03。北京オリンピックより速いです。北京オリンピックより速いです。はい、もう最後、最後の20メートルも残っていません。パクテファン、ジャンリンよりは体一つほどリードしている状況ですね。最後の5メートル。パクテファン、ほぼ入ってきました。最後の

5メートル。4、3。パクテファン、金メダルです。

(「2010광저우 아시아 경기대회 남자 200미터자유형 결승
(2010広州アジア競技大会 男子200メートル自由形決勝)」
MBC、2010.11.14 韓国放映)

数値を伝える名詞止め文のほかに常体は一文もなく、下線で示すように、すべての文末が敬体語尾で終わっている。

以上のように、日韓メディアの実況中継における言語表現を比べてみると、日本語では名詞止めのほかにも常体で終わる発話が多いのに対して、韓国語では名詞止め以外の常体はまったく見られず、すべて敬体の文末だけで発話していることがわかる。

メイナード(1991)は、ダ体とデスマス体の混用について述べる中で、「日常会話におけるダ体の意味」として3つをあげている。1つ目は、「急に思い出したり、感情を直接そのまま表現する時」、2つ目は「話者が物語の世界に入り、眼前描写する時」、3つ目は「はっきりと相手にむけて発話するのではなく、話者同士が発話を共同作成する時」である。

日本の実況中継におけるアナウンサーの常体の多用は、このような「感情を直接そのまま表現」したり「眼前描写」したりする意味合いを持っていると考えられる。それが、分秒を争う実際の競技映像とともに流れると、視聴者により臨場感を与えることができ、ひいては視聴者を画面に引きつけるという効果を生み出す。

一方、韓国の実況中継の場合、常に敬体を使用することで、視聴者に情報を伝える立場としてフォーマル度を維持する傾向が見られ、日本との違いが表れている。

韓国語の敬体には大きく2つの種類があり、1つは略待丁寧形といわれる「～(아/어)요」、もう1つは極尊待の「～(ㅁ/습)니다」である。上記の例(2)の文末では、「턴했는데요(ターンしましたね)」と「상황인데요(状況ですね)」の2例に略待丁寧形が用いられ、ほかの例ではすべて極尊待の「～(ㅁ/습)니다」が使われている。両者の違いについて李ほか(2004)では、前者の略待丁寧形が「今日の韓国で日常の対話で最もよく使用される言葉遣い」なのに対して、後者の極尊待は「格式性を帯びる」という点で略待丁寧形と区分され、「下位ないし同位の人に使うには不適切」であると述べている(pp.257-258)。ここからも、韓国の実況中継で常に敬体の

スピーチレベルを維持しているアナウンサーの発話が、中継を観ている視聴者を聞き手とする伝達者としての立場を明確に意識したものであることがうかがえる。ちなみに、略待丁寧形が用いられた上記の2例には感嘆を表す連結語尾の「～(느/ㄴ) 데」が含まれており、もともと極尊待の「～(로/습) 니다」が後接できない形式であるため、極尊待と略待丁寧形の切り換えがアナウンサーの意図的なスピーチレベルシフトでないことをつけ加えておく。

以上の考察から、実況中継というジャンルにおいて、競技の様子をより直接的に感じてもらうための臨場感が重視される日本と、視覚的情報を音声言語に整理して視聴者に伝えるという報道性が重視される韓国という、両国の映像メディア言語の語用論的特徴の違いが示された。

ちなみに、この現象の裏には、日本語の「相対敬語」と韓国語の「絶対敬語」という両言語独自の語用論的特徴が関係しているように思われる。相対敬語とは、対者によって話題の人に対するスピーチレベルを変える敬語運用のことで、たとえば、取引先の社員に自分の上司について話すときに「課長の山田はただ今出かけております」などと謙譲語を用いるような例である。それに対して、韓国語では同じような場面でも「과장님은 지금 외출중입니다. (課長はただ今お出かけ中でいらっしゃいます)」といって、対者によって話題の人に対するスピーチレベルを変えない絶対敬語を原則としている。ここから、もともと韓国語より日本語のほうでスピーチレベルシフトが頻繁に行われていることがわかる。このような両言語の敬語運用の違いが日韓の実況中継でのスピーチレベルシフトの相違に対する直接の要因とは言えないが、少なくとも両言語におけるスピーチレベルシフトの柔軟性の度合いに差があることは否定できない。

一方で、パラ言語表現に着目してみると、上記2例の日韓の映像メディアでは、両アナウンサーともに終始、軽快なリズムと興奮した口調で発話している。このように、映像メディアの主要要素である「映像」と「音」があいまって実況中継ならではの「臨場感」を醸し出し、視聴者を引きつけるという効果を生み出す。実況中継というジャンルの特徴ともいえる「眼前描写」を表現する上で、声のトーンやスピードなどのパラ言語表現は、日本でも韓国でもひとつの戦略として重要な役割を果たしているのである。

3. 日韓のスポーツニュースにおける言語表現

ここでは、ニュースの中でもとりわけスポーツニュースというジャンルの言語表現について、日本と韓国のテレビで放送された映像メディアの例を紹介、考察する。

多々良（2005）では、日本のスポーツニュースには、名詞句表現、いわゆる名詞止めという表現形式が多用されていることが数値で示されている。詳しく言うと、社会問題や事件などのスポーツ以外のニュースでは8%の名詞句が使われているのに対して、スポーツニュースでは53.7%が使われているということである。その上で、「スポーツニュース報道において名詞句表現が多用される要因は、名詞句表現は動詞文にはない軽快なリズム感とともに情報を簡潔に提示することができるということ（p.87）」で、「スポーツニュースでは情報を客観的に伝達することと付託的效果を狙って視聴者に感応的同調を求める狙いがあり、名詞句表現がこれらの役割を果たしている（p.89）」と述べている。

このような名詞句表現を、強弱を強調したイントネーションとともに用いると、「視聴者に感応的同調を求め、親近感を表す」という効果はさらに増していく。これは、とりわけ臨場感が重視されるスポーツニュースでより力が発揮できる。よって、この名詞句表現はスポーツニュースというジャンル独自の語用論的特徴のひとつだと言えるであろう。

この先行研究をもとに、まず以下の例(3)を紹介する。これは、日本の公共放送局NHKの定時ニュース番組「ニュースウォッチ9」での発話である。2013年7月24日に開催されたアイスショー「ザ・アイス」での浅田真央選手の演技について、その映像とともに以下の音声が流れる。

- (3) 浅田選手の曲はクラシックのノクターン。ピアノの音色に乗って軽やかに舞います。ジャンプではミスが続き、まだ調整の段階です。（インタビュー省略）それでも演技のテーマ初恋を情感を込めて演じきりました。まだ見せていないフリーの演技とともにシーズンに向け、これから本格的な滑り込みが始まります。

（「ニュースウォッチ9」NHK、2013.7.25 日本放映）

記者の発話の間に挿入された本人インタビュー場面を除いて、41秒間の5つの発話のうちに名詞句表現で終わっているのは1文のみであり、名詞

句表現の割合は前述した多々良（2005）の調査結果である53.7%とはほど遠い20%に過ぎない。

つぎに、韓国のスポーツニュースの中から、報道内容が類似する映像を選んで紹介する。以下の例(4)は、韓国のテレビ局MBCで放送された「뉴스데스크（ニュースデスク）」という報道番組のスポーツニュースコーナーでの発話である。内容は、2011年5月6日にソウルで開かれた「アイスショー」のことで、フィギュアスケートのキムヨナ選手が演技する映像とともに以下の音声が流れる。(4)がもとの韓国語発話、(4)'がその日本語直訳で、実線部が名詞句表現、波線部が敬体語尾である。

- (4) 감쪽한 오렌지색 스커트를 입고 나타난 피겨여왕의 등장에 팬들은 열광했고 여왕은 전매특허 스핀으로 그 성원에 보답했습니다. 그리고 드디어 시작된 김연아의 지젤. 비련의 요정으로 변신한 김연아의 연기는 조명속에서 더욱 빛났고 고난도의 점프까지 멋지게 성공시키며 세계선수권대회에서의 실수에 대한 아쉬움도 함께 날려버렸습니다. 가장 눈여겨볼 포인트로 꼽혔던 강렬한 스텝동작과 함께 환상적인 마무리 스핀까지 목격한 관객들은 박수갈채를 빙판 위에 쏟아냈습니다. 현재 객부공연을 진행중인 김연아는 잠시 후 처음으로 공개하는 갈라프로그램 피버를 선보일 예정입니다.
- (4)'かわいらしいオレンジのスカートを着用して現れたフィギュア女王の登場にファンは熱狂し、女王は専売特許のスピンの声援に応えました。そしていよいよ始まったキムヨナのジゼル。悲恋の妖精に変身したキムヨナの演技は照明の下でさらに輝き、高難度のジャンプまで素敵に成功させて、世界選手権での失敗に対する悔しさも一緒に吹き飛ばしました。もっとも注目すべきポイントと言われた強烈なステップ動作とともに幻想的な仕上げのスピンまで目撃した観客は、拍手喝采を氷の上に浴びせました。現在2部公演の真っ最中のキムヨナは、もうすぐ初めて公開するガラプログラムのフィーバーをお披露目する予定です。

(「뉴스데스크（ニュースデスク）」MBC、2011.5.6 韓国放映)

波線部のように、45秒間の5つの発話のうち、80%に相当する4つの文末で敬体、それも極尊待の「～(ㅁ/ㅅ)니다」が用いられており、ニュース番組のコンテキストが全体的に敬意度の高い動詞文で維持されているの

が見て取れる。

以上の(3)と(4)の例だけでは、多々良(2005)の考察の狭さが証明された上に、かえって日韓のスポーツニュースの言語表現の類似性が浮き彫りになったとも言える。しかし、これにはジャンル特性の違いが強く影響していると考えられる。それを裏づける談話として、以下の例(5)を紹介する。

これは、テレビ朝日の「ワイド!スクランブル」という夕方の情報番組の中のスポーツニュースコーナーでの発話である。内容は、2011年7月27日に青森で開かれた「THE ICE 東北公演」の中で、フィギュアスケートの浅田真央選手が演技を披露したというものである。浅田選手がリンク上で滑っている映像とともに以下の音声が流れる。

- (5) ショーの中でも一際観客を沸かせたのはやはり浅田真央選手。まずはデイズニーマニメ『アラジン』のヒロインに扮して、トリノオリンピックのメダリストジェフリーバトル選手とさわやかなダンスを披露。ショーの後半には大人っぽい衣装で再び登場。『ルパン三世』の峰不二子に扮しました。小塚選手と二人楽しさ一杯の演技に会場は大盛り上がり。そんな浅田選手がこのショーのために用意したしっとりしたソロプログラム。震災後に新しく振り付けされたこの演目には被災した方々に向けての特別な想いが込められていたのです。

(「ワイド!スクランブル」テレビ朝日、2011.7.28 日本放映)

下線で示しているように、名詞句表現がほとんど用いられなかった例(3)と違って、1分9秒間の7つの発話のうち5つの文末が名詞句表現で(71.4%)、これは多々良(2005)で示された53.7%よりも高い使用頻度である。

この例(5)を韓国の映像メディアの例(4)に比べると、「名詞止めを多用する日本」と「敬体の文末を維持する韓国」という両国の映像メディアの語用論的特徴の相違が見られ、多々良(2005)の主張を裏づける結果となる。これは、前述した例(3)との比較とはまったく異なる結果である。

ここで注目すべき点は、日本の映像メディアの例として取りあげた例(3)と例(5)のリソースとなるテレビ番組のジャンル特性である。表向きには両者ともスポーツニュースと言えるが、例(3)での発話「ニュースウォッチ9」は報道番組で、例(5)での発話「ワイド!スクランブル」は、いわゆるワイ

ドショーというジャンルの情報番組である。また、韓国の映像メディアの例として取りあげた例(4)は報道番組というジャンルに属する。つまり、同じ日本の報道番組の中でのスポーツニュースを例にあげて、日韓の映像メディアの談話を比べたときには類似点が浮き彫りになったが、ワイドショーというジャンルの情報番組と比べたときにはまったく異なる結果になったのである。

以上の結果をもとに、次の節では、日本の両テレビ番組のジャンル特性に注目して考察を続ける。

4. 映像メディアのジャンルによる特性

『広辞苑』(1998)には、ワイドショーといわれる情報番組のジャンルについて、「芸能情報を中心にニュースや生活情報など幅広い内容を伝えるテレビ番組」と記されている。記述どおり、取りあげる内容もある程度の背景知識が必要とされる政治や時事などより、芸能・スポーツといった単純でわかりやすいネタが多く、従来のニュース報道番組に比べると「軟派」「低俗」といったイメージが強い。これに関連して、伊藤(2006)は、夕方のワイドニュース枠は視聴者の中心が主婦層であることを指摘し、「夜のニュースに比べて政治・経済のニュースが少ないことから、その内容の『ソフト化』が問題化されることが多い (p.124)」と言って、「エンターテインメント化」「ソフト化」などのニュースのバラエティ化をめぐる議論について触れている。

このように、ワイドショーといわれる情報番組のジャンルは、硬派な報道番組とは異なり、報道性より娯楽性が優先される。事実を正確かつ客観的に伝えるという報道本来の機能ではなく、視聴者を情動的に動かすための伝え方、いわゆる「演出」が重視されるジャンルなのである。

一例として、萩原(2001)は、ニュース番組・モーニングショー・ワイドショー・週末番組の4ジャンルによるニュースの報道量と内容を分析している。そこで、「ワイドショーにおける都知事選関連報道は、ニュース番組やモーニングショーとは内容の趣きをまったく異にしている」ことに注目し、「ワイドショーの場合には(中略)当選した石原や落選した候補者のプライベートな部分を含めて、人間的興味に訴えるようなストーリーが主流を占めている」と述べられている (p.140)。

一方、韓国のテレビ放送では、日本のワイドショーのようなニュース情

報番組は一般的ではない³⁾。朝の時間帯を中心とした「時事・教養番組」という放送ジャンルの枠で、生活情報を幅広く扱う番組がいくつか存在するが⁴⁾、番組構成上、ニュースコーナーとその他のコーナーが形式的にも明確に分かれていることが多い。つまり、韓国のテレビ放送におけるニュース番組は報道性が最優先であり、日本のワイドショーのように娯楽性を加味した報道という中間的なジャンルは存在しないと考えていいのであろう。

以上、日韓のスポーツニュースを例として番組独自のジャンル特性が言語表現に強く影響していることについて述べた。しかし、テレビ番組の言語表現は本来、番組制作側の意図やテレビ局の性向などと複雑に絡み合って表出されるものであり、限られたいくつかの発話例の分析だけで容易く結論を導き出すことは危険である。

近年、日本では「報道番組のエンターテインメント化」「テレビニュースのソフト化」が度々話題に上っている。報道番組全般において、政治・時事などのハードニュースよりスポーツ・芸能などのソフトニュースの比重が高くなり、さらにフリップやテロップ、CGなどの演出が当たり前になってきている。これらの現状について、「情報番組、ワイドショーとの区別がなくなってきていても、番組の境界がぼやける、いわゆるオフジャンル化も起きている」と危惧する声も少なくない（深澤2011、p.28）。本稿では「報道番組のエンターテインメント化」の影響がもっとも少ないと思われるNHKの報道番組のスポーツニュースを例にあげ、ワイドショーのスポーツニュースコーナーと比べることで、ジャンルによる語用論的特徴を示しているが、近年の「オフジャンル化」現象までを視野に入れて議論すれば、当然ながら、さらなる広範囲かつ多面的な考察が必要になると考える。

5. まとめ

本研究では、日韓対照の観点から、両言語によるスポーツ情報番組を考察対象として、それらの映像メディアの言語使用の実態を分析した。その結果、実況中継とスポーツニュースという同じスポーツ情報番組における日韓の言語表現の違いを明らかにした。詳しくは、日韓のテレビ放送の実況中継における言語表現を比べて、日本語では常体で終わる発話が多いのに対して、韓国語では敬体の文末だけで発話していることを示し、臨場感を重視する日本と、報道性を重視する韓国という、両国の映像メディア言

語の語用論的特徴について述べた。

さらに、ニュース報道番組とワイドショーとの言語表現を比較し、娯楽重視の番組ほど名詞句表現が多く見られる傾向があることを示し、映像メディアの番組独自のジャンル特性がその言語表現に強く影響していることを述べた。

今後も引き続き、映像メディアのジャンルと日本語と韓国語の言語構造や表現の違いという要素を有機的に関連づけて考察していく必要がある。さらに、映像メディアの日韓・韓日翻訳の際に起こる語用論的な変化にも注目して考察の対象を広げていくことで、メディア言語研究のさらなる充実を図っていきたい。

注：

- 1) 一例として、日本の公共放送であるNHKの公式サイト
(www.nhk.or.jp) には、現在放送中のテレビ番組が、「ニュース・報道、スポーツ、情報・ワイドショー、ドラマ、音楽、バラエティ、映画、アニメ・特撮、ドキュメンタリー・教養、劇場・公演、趣味・教育、福祉、キッズ、語学」という14のカテゴリに分類、紹介されている。
- 2) 役割語とは、金水敏によって提唱された用語で、以下のように定義される。「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを『役割語』と呼ぶ。（金水2003：205）」
- 3) 韓国のテレビ放送では、「연예가중계（日本語題名：芸能界中継）」や「한밤의 TV연예（日本語題名：SBSテレビ芸能）」「와이드 연예뉴스（日本語題名：WIDE ENTERTAINMENT NEWS）」といった芸能ニュース専門の情報番組があるが、これらは報道系ニュース番組とは明確に区別されており、スポーツニュースも扱っていない。
- 4) 代表的な朝の情報番組として、KBSの「뉴스광장（ニュース広場）」「굿모닝 대한민국（グッドモーニング大韓民国）」、MBCの「뉴스 투데이（ニューストゥデー）」、SBSの「모닝 와이드（モーニングワイド）」

などがある。

参考文献：

- 井出里咲子（2003）「なぜ日本のトークバラエティにはホストがたくさんいるのか：バーバル・アートの観点からの考察」『第12回社会言語科学会研究大会予稿集』、p.189-192
- 伊藤守（2006）『テレビニュースの社会学－マルチモダリティ分析の実践』世界思想社
- 李翊燮・李相億・蔡琬（前田真彦訳）（2004）『韓国語概説』大修館書店
- 金水敏（2003）『もっと知りたい日本語 ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 多々良直弘（2005）「ニュースのレトリック－スポーツニュース報道における言語使用」『社会言語科学会第16回大会発表論文集』、p.86-89
- メイナード、泉子K.（1991）「文体の意味－ダ体とデスマス体の混用について－」『言語』2(2)、p.75-80
- 萩原滋編著（2001）『変容するメディアとニュース報道』丸善株式会社
- 深澤弘樹（2011）「テレビニュースの娯楽化とマルチモダリティ分析の可能性」『駒澤社会学研究』43、p.27-54

ちょん　へそん（国際教育研究センター准教授）

Pragmatic features of sports information programs caused by genre:
Difference of speech level shift in contrastive viewpoint
between Japanese and Korean

JUNG, Hyeseon

This paper compares and contrasts the Japanese and Korean languages in sports information programs on the TV and indicates that the genre of each program strongly affects pragmatic features of linguistic expression in each language. An example of the genre influence is the utterance of reporters in live report programs. Japanese reporters mixed the polite style with the ordinary style while Korean reporters used only the polite style. Furthermore, in "Wide Show" which is a genre peculiar to Japan, the function as entertainment is emphasized more than the function as a report, and it has its own practical features. Thus, even in the same sports information program, there is a difference in language expression between Japanese and Korean. Taking into account the conclusion of this paper, the author will continue to conduct research on video media language, focusing on the relation among three elements: genre of media, linguistic differences of the two languages, and translation.

Key words: genre, live report programs, wide show, speech level shift